

官話と北京語

中村雅之

1. 清末の官話と北京語

19世紀末の北京の言語は、「官話」あるいは「京話」と称された。この二つは概念上のニュアンスは異なるが、実態はほとんど変わらない。要するにどちらも「北京語」である。概念としては「官話」は役人や知識人の話すべき言語であり、「京話」は地理的方言としての北京語である。後者は庶民の北京語という含みを持つことがあり、また満洲語的な漢語という意味合いが付加されることもある。「yesterday」に相当する語は、おそらく官話では「昨天(zuotian)」、京話では「昨兒箇(zuorge)」ということになるであろうが、これは語彙選択の問題であって、言語としての体系的な違いがあるわけではない。

高田(2001)に述べられているように、アヘン戦争以後、北京語が外交言語として有力になり、それまで明清を通じて役人たちに広く用いられていた南京官話にとって代わることになった。なお、「南京官話」とは現代の我々が「北京官話」と区別して用いる呼称であって、当時は単に「官話」と呼ばれた。「北京官話」も実際には単に「官話」と称されることが多く、文献で「官話」と記される時、いずれの官話を意味しているか曖昧なことがある。「南京官話」は入声短促調として独立した声調である点や、声母において尖団の区別(tsi/kiなど)が明瞭である点などにおいて「北京官話」とは大きく異なるものであった。

言語研究の立場から見れば些か奇妙なことであるが、「南京官話」と「北京官話」は実態において差異の大きいものでありながら、「官話」という共通の概念でくられており、一方、「北京官話」と「京話」は事実上同一の言語でありながら、あたかも異なる言語であるかのように表現されることが多いのである。

高田(2001)に趙元任の自伝から幼少期の言語環境を紹介した部分がある。それによれば、「小さい頃、話していたのは一種の北方語で、古い言い方では官話ということになる。我々の家には本当の京話を喋るものはいなかった」とし、さらに「我々より年輩の人が話すときには必ず少しは南方のなまりがあって、特に入声字は改め難いものがあった」という。つまり、幼少の趙元任が話していたのは「一種の北方語」すなわち「官話」であった。この場合の「官話」は「北京官話」ということであろう。そして年配の人が話していたのは、南方訛りはあるがやはり官話であって、こちらは「南京官話」に近いものと考えることができる。そして彼の家に「本当の京話」を話すものがいなかったとは、要するに純粹の北京語を話さなかったということで、これは南方出身者であるならば当然と言える。注意すべきは、趙元任にとっても、「(北京)官話」と「京話」が明瞭に区別されていることである。

概念として「北京官話」と「京話」とが異質なものであったことは趙元任の証言によっても明らか

であるが、言語事実としてこの二者にどれほどの違いがあったかという点については、どの資料を見ても明確ではない。例えば、ウェイド(Thomas F. Wade)による著作『語言自邇集』(1867)は北京語のテキストとして西洋でも日本でもよく用いられたが、高田(2001)によれば、その言語は実質的に「京話」であるという。しかしウェイドのこの書は通常「北京官話」を学ぶために用いられたのである。つまり「京話」のテキストによって「北京官話」を学んだことになる。そのようなことが可能だったのかといえ、可能であったし、方策としてもやむを得ぬものであった。

19世紀初頭以前の官話すなわち「南京官話」は、ある程度地域差や個人差を許容する、ある意味で抽象的な共通語であった。西欧の宣教師たちの記述によれば、その言語は南京の発音を標準とし、全国の役人たちの間でよく通じるものであったという。佐藤昭(1988, 1989)によれば、19世紀末～20世紀初頭においてさえ、山東・南京・四川の官話はほぼ同質と言える音韻体系をもっていた。19世紀以前にも同様であったことは想像に難くない。その中で、北京の役人だけは北京語を話しており、他の地域の官話とは著しく異なっていた。「学」の発音は南京官話では[hioʔ]であったが、北京では[ɕiau]または[ɕio](> [ɕyɛ])であり、南京官話の「我們兩個人」は北京では「我們倆」であった。かくも異なる言語であるにもかかわらず、全国の役人たちはあくまでも「官話」として北京語を捉えようとした。

19世紀後半に、徐々に北京語が影響力を増してくるにつれて、役人たちも北京語を話す必要に迫られることになったが、その際におこなったことは、従来の官話を北京風に発音することであったろう。つまり多くの役人にとって、語彙や語法においては南京官話を用いつつ、発音のみを北京語式に変えたもの、それが「北京官話」のイメージであったに違いない。実際には北京の役人でそのような「北京官話」を話すものは多くなく、ほとんどが従来の北京語(つまり京話)を話していたと思われる。ウェイドが北京人のインフォーマントと共に作り上げた『語言自邇集』が、「京話」であるのは当然であろう。しかし外国人が習おうとする北京語はあくまでも標準的な中国語としての北京語、すなわち概念上の「北京官話」であった。したがって、「京話」を材料としつつも、それをおそらくは無意識的に「官話」と見なして利用した。それは当時の状況からは致し方のないことであり、同時にまた結果としては最善の方法であったとも言える。

趙元任が幼年期に話していた言語を「一種の北方語」と称したのは、まさに言い得て妙である。北京風の発音で(伝統的な)官話を話していたということであって、それこそが「北京官話」の言語的な実態だったのであろう。

2. 明代の官話と北京語

清末の南京官話と北京語の音韻体系が差異の大きいものであったことは上述の通りであるが、明代にはその差異はむしろ小さかった。明代には北京語においても尖団の区別が明瞭であったからである。したがって、明代の南京官話と北京語の主な違いは、音韻面に限れば、入声韻尾の有無を含む入声韻の音形(上述の「学」など)と、果撰牙喉音1等の韻母(「哥」は官話で

[ko]、北京語で[kɔ])のみであった。

明代官話と北京語の関係で興味深いことの一つは、北京語における文言音の形成である。文言音とは、官話の音形の模倣というべきもので、伝統的な北方音(=白話音)のほかに官話音に類した音形が北京語の中に入り込んだものである。「学」を例に取れば、元代以来の北方音は、パスパ文字表記や『洪武正韻訳訓』の「俗音」(およびそれを間接的に継承した「翻訳老乞大・朴通事」左側音)などによって知られる[hiau]である。これに対して「翻訳老乞大・朴通事」右側音には[hio]が記されており、これが南京官話音[hioʔ]を模倣した文言音である。文言音[hio]は音変化を経て現代音の[ɕyɛ]となっている。

北京語における文言音の形成は、南京官話の影響が全国に広がっていたことを示す指標でもある。換言すれば、明初における南京方言が次第に影響力を増して役人の共通語たる「官話」になる時期は、北京語に文言音が形成された時期にほかならないと考えることができる。この観点に立つならば、南京官話がその影響力を獲得した時期を、ある程度限定することが可能になる。

15世紀半ばの『洪武正韻訳訓』に「俗音」としてハングルで示されている音は当時の北方音であるが、そこにはいわゆる文言音に相当する音形は全く見当たらない。つまり15世紀前半までの北方音には文言音が広がっていなかったと考えてよい。これに対して16世紀初頭「翻訳老乞大・朴通事」右側音には、文言音と呼びうる音形が大量に含まれており、入声韻の音形としてすでに文言音と白話音に相当する二系統があったことが分かる。これによって見れば、南京官話が北京など北方に影響力を持つようになった時期はおおむね15世紀後半と考えることができるのである。

なお、最近出たブリグト(2007)では、明初の資料である『元朝秘史』の漢字音訳の基礎方言を北方方言と見なし、さらに「文白異読」が見られるとしているが、誤解であろう。本誌前号の拙稿に述べたとおり、『元朝秘史』漢字音訳の基礎方言は南京方言と考えるべきであるし、明初にはまだ後の北京語のような「文白異読」は形成されていなかったと思われること、上述のとおりである。

< 参考文献 >

佐藤昭(1988, 1989)「清末民国初期の官話方言の音韻 - 欧文の字典資料を対象として -

(1),(2)」『北九州大学外国語学部紀要』第64号,第67号。

高田時雄(2001)「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『シンポジウム西洋近代と中国』京都大学学術出版会。

ブリグト(2007)『元朝秘史』における漢字音の「文白異読」『日本モンゴル学会紀要』37。